

『イフ・フフ・トグ』誌について

ウリジバヤル

2013年6月

新潟産業大学経済学部紀要 第42号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.42 June 2013

『イフ・フフ・トグ』¹ 誌について

A study of *Иф Фүф Түг* (A Large blue flag)

ウリジバヤル
Wuljibayar

要旨

1932年に満洲国が日本によって建国され、1945年に日本の敗戦と共に崩壊した。この時期のモンゴル族は大きく三つに分かれて住んでいた。一つは、モンゴル人民共和国にいるモンゴル族、そして満洲国にいるモンゴル族、それから独立を試みていた蒙疆自治政府のモンゴル族の三つである。このわずか十数年の間にモンゴル民族は特別な歴史を歩んでいたことになる。だからこの時期に発行されていた各書物も大きな歴史的な価値がある。また文学の面からもその政権下の民衆の生活ぶりを窺うことができる。

この小論文では、『イフ・フフ・トグ』誌に掲載されている文学作品をその時代の背景に照らし合わせて、満洲国内のモンゴル人と日本人の社会を考察する。

1. はじめに

『フフ・トグ』² 紙は大阪外国語大学にほぼ全てが、東京外国語大学に数十部と内モンゴル図書館に数部が所蔵されている。この新聞は1941年1月6日に刊行を開始し、1945年7月23日まで178期にわたって週刊で発行された。

フフ・トグ社は、1943年1月、『フフ・トグ』の姉妹雑誌として、モンゴル語の文芸雑誌である『イフ・フフ・トグ』誌を創刊した。同紙の編集人は竹内正であり、挿絵を森和³（森健の弟、モンゴル名はナイラルト）が担当した。『イフ・フフ・トグ』誌創刊号は2000部発行され、定価は2元である。『イフ・フフ・トグ』誌には、日本の文学小説を翻訳したもの、モンゴル人の文章、日本語講座などが掲載され、読者の原稿も募集していた。

広川佐保2007⁴によるとこの時代は「1940年代以降、満洲国政府は、興安振興三力年計画により、国内モンゴル人に対する文化政策を強化していたが、これと連動するかのようにはモンゴル人のなかからも、モンゴル政策の改善を求める声が高まりつつあった。たとえば1940年以降、満洲帝国協和会主催の全国連合協議会に参加した興安省代表のモンゴル人たちは、対モンゴル政策の拡充と、蒙政

1 『yeke köke tug』『大青旗』

2 ウリジバヤル2009「『フフ・トグ』（青旗）紙とは何だったか — 「新京」で刊行されていたモンゴル語新聞の紹介」

3 広川佐保2007『満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展』

4 同上

部のように興安省地域を束ねる機関の設立を要求していた。たとえば、1941年10月に開催された康德8年度全国連合協議会において、興安西省の代表は、満洲同政府に対して、蒙政部のように興安地域全体を束ねる特別機関を設置してほしいという要望があったが却下された」という状況であった。1942年度よりフフ・トグ社は新聞社から雑誌社に変わった。満洲国がモンゴル人の要望に応えようとし『イフ・フフ・トグ』誌の刊行を行ったと思われる。

2. 現存する巻と発行日と細目

『イフ・フフ・トグ』誌は隔月号であり、欠号となっている第二巻第二号と第二巻第三号の発行日を隔月で推測したものである。また終戦になる8月まで同じく隔月刊で計算していけば第三巻第四号まで発行したことになる。つまり戦時状況に左右されなかったと考えれば通号16期までの発行は可能であった。二木博史（1998）によれば、東京外国語大学モンゴル研究室に第1号から第5号、第7号、第10号の計7冊が所蔵されている。筆者は上記のほかに第6号、第11号、第12号、第13号を新たに発見した。

以下現存号の発行年月とその細目を日本語に翻訳したものである。

創刊号	第一巻	第一号 (1)	正月号	1943.1.15
第一巻	第二号	(2)		1943.3.15
第一巻	第三号	(3)		1943.5.15
第一巻	第四号	(4)		1943.7.15
第一巻	第五号	(5)		1943.9.15
第一巻	第六号	(6)		1943.11.15
第二巻	第一号	(7)		1944.1.15
第二巻	第二号	(8)	欠	1944.3.15
第二巻	第三号	(9)	欠	1944.5.15
第二巻	第四号	(10)		1944.7.15
第二巻	第五号	(11)		1944.9.15
第二巻	第六号	(12)		1944.11.15
第三巻	第一号	(13)		1945.1.15

第一巻（創刊号）（第一号）（1）

- | | |
|------------------|------------------|
| ◇ 祝辞 | ◇ 清朝の蒙古改善方法 |
| ◇ 発展中の満洲国 | ◇ 簡略東亜史（上） |
| ◇ 我が満洲国が次にやるべきこと | ◇ モンゴルの敵は誰なの |
| ◇ 東亜の文化と世界の文化 | ◇ アリュウシャン列島を略奪する |
| ◇ 国交状況と民衆生活の関係 | ◇ ドイツとソビエト戦争の批評 |
| ◇ 南洋について | ◇ ソロモン海の戦記 |

- | | |
|---------------|--------------------|
| ◇ 子供の対話 | ◇ 風刺画 |
| ◇ 天体について | ◇ ソロモン海の戦争とアメリカの情報 |
| ◇ 魚雷の奇妙さ | ◇ 卵を見分ける方法 |
| ◇ 食べ物について | ◇ 妊婦が注意すべき点 |
| ◇ 時間と日の影 | ◇ 警戒心を忘れるな |
| ◇ 詩 翼の讃え | ◇ 著作することは有益である |
| ◇ 詩 昭南島を詩吟する | ◇ 奇聞 |
| ◇ 詩 運命 | ◇ 健康に関する知識 |
| ◇ 奇異な場所熱河 | ◇ 人と家畜の衛生のこと |
| ◇ 蒙古青年の話 | ◇ 冬は我慢して夏に繁栄させる |
| ◇ 家畜をよくする | ◇ 大青旗の四季 |
| ◇ 病みを治す方法 | ◇ 援助を受けている学生 |
| ◇ どうやって母になる | ◇ 土と兵 |
| ◇ 原稿募集の告知 | ◇ H21というスパイ |
| ◇ 子供の物語 助け合う心 | ◇ 険しい森林 |
| ◇ 笑い話 | ◇ チンギスハーン |

第一巻 第二号 (2)

- | | |
|------------------|------------------|
| ◇ 表紙 三月の空 | ◇ ダライラマ14世を捜し求めて |
| ◇ 巻頭の詞 | ◇ 人口は国の基礎 |
| ◇ 建国以来の回想 | ◇ チチハルの名前の由来 |
| ◇ 真贋運命 | ◇ 家庭衛生 |
| ◇ 物が稀になると人の運気が増す | ◇ 笑い話 |
| ◇ シンガポール市の戦記 | ◇ 風刺画 |
| ◇ アメリカとイギリスの実情 | ◇ 固有名詞の蒙古略称 |
| ◇ 怖がっているソビエトの状況 | ◇ 日蒙講座 |
| ◇ アジア史 (中) | ◇ 戦友 |
| ◇ 現在のモンゴルの状況 | ◇ 小さい駅の鳥の籠 |
| ◇ 農産物の用途 | ◇ 春を知らせる鳥 |
| ◇ 天体について | ◇ 南海の青年 |
| ◇ 赤ちゃんについて | ◇ 別れ |
| ◇ 詩 12月8日 | ◇ 国軍の勇姿 |
| ◇ 詩 日本の陸軍 | ◇ 森林の中の軍隊 |
| ◇ 詩 種 | ◇ 麗しく娘 |
| ◇ 各種の船の説明 | ◇ 日蒙会話講座 |
| ◇ 積極的に農業をやる | ◇ 巻末詞 |
| ◇ 蒙古地方の鬼について | |

第一巻 第三号（3）

- ◇ 表紙 前に進む
- ◇ 巻頭の詞
- ◇ 旗長らに申請する
- ◇ 南洋の戦争を批判する
- ◇ アメリカ、イギリスを滅ぼし、英雄らの
仇を討つ
- ◇ 日本海の戦争状況
- ◇ ソビエトは他民族を侮っている
- ◇ パラシュート
- ◇ 幼児教育
- ◇ 世界地理について
- ◇ 五大洲の名前の由来
- ◇ モンゴルという名の解釈
- ◇ 扎蘭屯紀行

- ◇ 鼻 司馬龍太郎
- ◇ 簡略アジア史（下）
- ◇ 軍が強くなるには身の鍛えである
- ◇ お香の時計
- ◇ 紙を作る知識
- ◇ 問答の部屋
- ◇ 一般知識
- ◇ 詩 馬飼いの子供
- ◇ 雑誌は武器である
- ◇ 日蒙会話講座
- ◇ アヘン戦争
- ◇ 麗しく娘
- ◇ 巻末詞

第一巻 第四号（4）

- ◇ 表紙 女の子
- ◇ 巻頭詞
- ◇ 勝つために財産を増やそう
- ◇ 絶対勝つ秘策
- ◇ 戦時の節約
- ◇ 日本海軍の賛歌
- ◇ 潜水艦の軍人らの戦争についての話
- ◇ 新中国の政治実行の概要
- ◇ 詩 登山
- ◇ 詩 星が落ちた
- ◇ 笑い話 微笑み
- ◇ 興安高等女子学校の生徒らが青旗社を見学
- ◇ 勝利するフィリピン戦争に努める娘
- ◇ 鉄が不足しているイギリス
- ◇ 外蒙古の悲しいこと
- ◇ 新しい季節
- ◇ 皇帝に国に感謝する
- ◇ 熱河の展覧を見た感想
- ◇ 南方旅行記

- ◇ 人と学問
- ◇ 東亜協栄圏と船
- ◇ 東京に行く旅の中
- ◇ 若者が知ることと努めること
- ◇ 言い聞かせる
- ◇ 蹄の音
- ◇ 南方のこと—ご飯作る時間で時計を計る
- ◇ 前世にやったことが来世に終わる
- ◇ 悲劇から咲いた花
- ◇ 物とお金
- ◇ 戦争に必要な馬
- ◇ 十戸の戸長になれなかった物語
- ◇ 亀と象
- ◇ 逃げ去った月の物語
- ◇ 猿とホテルの戦い
- ◇ 安産と赤ちゃんの教育
- ◇ 女の子の常識
- ◇ 学生時代と嫁に行く時期
- ◇ 歩くことの必要性

- ◇ 五大洲の山と高地の名称
- ◇ 夜の訓練
- ◇ 太陽と炭火
- ◇ ヨーグルトで子供の下痢を治す方法
- ◇ 家庭医学
- ◇ 肺炎を治す方法

- ◇ オルション族について
- ◇ 『宮本武蔵』(日文) 作者 吉川英治
- ◇ 『宮本武蔵』の説明
- ◇ 日蒙会話講座
- ◇ 卷末詞

第一巻 第五号(5)

- ◇ 表紙
- ◇ 巻頭詞
- ◇ モンゴル人の生活と家畜
- ◇ モンゴルの草原
- ◇ 興安モンゴルの復興史
- ◇ モンゴル家畜に対する政策
- ◇ 内モンゴル旅行記
- ◇ 要人
- ◇ 戦争に力を貸す
- ◇ 酒について
- ◇ 火山について
- ◇ 敵に聞いた南海戦争
- ◇ 節約して敵を倒す

- ◇ 安産と赤ちゃんの教育
- ◇ 地球の引力
- ◇ 子供が多い家庭の利点
- ◇ 詩 ニャン シ グワン
- ◇ 団結の力と民族関係
- ◇ 創造者ナソンモンヘ氏
- ◇ 科学の質問
- ◇ ホンゴル・ジョラ娘の従軍する劇
- ◇ 『宮本武蔵』(日文)
- ◇ 東亜仏教青年大会の状況
- ◇ ラマたちの念仏のこと
- ◇ 日蒙会話講座
- ◇ 卷末詞

第一巻 第六号(6)

- ◇ 表紙
- ◇ 巻頭詞
- ◇ 公務に取り掛かる論
- ◇ 安産と赤ちゃんの教育
- ◇ 馬を繁殖する
- ◇ 家畜を改善する目的
- ◇ 非常時期と生産物の増加
- ◇ モンゴル人と教育
- ◇ 努力することは素晴らしいことである
- ◇ 南方旅行記
- ◇ 豆知識
- ◇ 二つのこと
- ◇ 気をつけること

- ◇ 天の声地の声
- ◇ 笑える詩
- ◇ 笑い話
- ◇ 子供のなぞなぞ
- ◇ 子供の遊び
- ◇ 我々も国を守ろう
- ◇ ジャライ湖紀行
- ◇ 野原で訓練して遊ぶ
- ◇ 冬至について
- ◇ 子供の科学 氷について
- ◇ 卵について
- ◇ 人間の顔を持つ猿
- ◇ 詩 地図

- ◇ アジアのため
- ◇ 満洲協和会
- ◇ 興安学校の十周年記念
- ◇ 国家の繁栄は国民にある
- ◇ 食糧の中心地満洲

- ◇ 『宮本武蔵』(日文)
- ◇ ゴビ南の青年の涙
- ◇ 日蒙会話講座
- ◇ 卷末詞

第二巻 第一号 (7)

- ◇ 表紙
- ◇ 巻頭詞
- ◇ 戦友別盃の歌 (日文)
- ◇ 四季と戦争
- ◇ 興安総省の設立と我らのやるべきこと
- ◇ 大陸の国保政策
- ◇ 南方旅行記
- ◇ 笹の帽子と仏像
- ◇ スパイとは
- ◇ 我らの努力
- ◇ 北の風が吹く
- ◇ 夢
- ◇ 詩 努める学生たち
- ◇ 私たちの目とカメラのレンズ
- ◇ 考えてみて
- ◇ 占いの話
- ◇ 空を飛ぶ袋

- ◇ 安産と赤ちゃんの教育
- ◇ ご飯一粒
- ◇ 質問室
- ◇ 若者を教育する先生は偉大である
- ◇ モンゴル語を教えている学生たち
- ◇ ホロンバエルの朝 (日文)
- ◇ 体を鍛える
- ◇ 大東亜戦争に共に闘う
- ◇ モンゴル学生の座談会
- ◇ タバコについての批判
- ◇ 世界の川の名称
- ◇ モンゴル結婚式の祝詞
- ◇ モンゴル物語の変移
- ◇ 二人の英雄の物語
- ◇ 『宮本武蔵』(日文)
- ◇ 蒙日会話講座
- ◇ 卷末詞

第二巻 第二号 (8) 欠号

第二巻 第三号 (9) 欠号

第二巻 第四号 (10)

- ◇ 表紙
- ◇ 画報—洛陽を占領した
- ◇ 巻頭詞
- ◇ 全亜細亜民族に叫ぶ (日文)
- ◇ 旗 (大東亜戦争詩蒙訳)
- ◇ 東北に帰って悟る
- ◇ 壊せ—敵の探検団を

- ◇ 国家と民衆
- ◇ 新兵器
- ◇ アメリカ・イギリスの悩み
- ◇ 販売している本
- ◇ 洗濯する方法
- ◇ 東亜が勝利する情報
- ◇ 南方旅行記

- ◇ 東亜の人に忠告する
- ◇ 総理の妻
- ◇ スパイの秘密情報
- ◇ キリスト教の先生
- ◇ スパイの中スパイがいる
- ◇ 子どもが考えること
- ◇ 雨・風・雪
- ◇ マンモスとマストドン象

- ◇ 風に吹かれる水
- ◇ 読者投稿欄
- ◇ 助産婦の懇親会の記録
- ◇ 文章を書く方法
- ◇ イルチユス（耶律楚材）
- ◇ 日蒙会話講座
- ◇ 巻末詞

第二巻 第五号（11）

- ◇ 表紙
- ◇ 画報－海の詩
- ◇ 雨ニモマケズ（日文）
- ◇ 巻頭詞
- ◇ 青旗社からの告知
- ◇ 日本の大東亜政策
- ◇ 国家と民衆
- ◇ 南方旅行記
- ◇ 戦争に使う数学
- ◇ 世界最終戦
- ◇ 敵の兵の損害
- ◇ アメリカの新飛行機
- ◇ 重慶の悲しい状況
- ◇ 学生たちが仕事する
- ◇ 雷の発生
- ◇ 総省の進歩
- ◇ 雨・風・雪

- ◇ 文章書く方法
- ◇ みんなで努力しよう
- ◇ 蒙古史の讃辞
- ◇ 流産を防ぐ
- ◇ 母たちの考え
- ◇ 日蒙会話講座
- ◇ 『青旗』紙に使う語彙
- ◇ イルチユス
- ◇ 敵の突撃を警戒する
- ◇ 桃太郎（蒙日文）
- ◇ 田舎が貧しくなる原因
- ◇ 昭南島で戦死兵の祭祀塔を建てた
- ◇ 錦洲、阜新に回った記録
- ◇ 興安モンゴルの家畜生産
- ◇ 内モンゴルの家畜
- ◇ 巻末詞

第二巻 第六号（12）

- ◇ 表紙
- ◇ 画報－蒙古青年の訓練大会
- ◇ 詩 此の糧（日文）
- ◇ 巻頭詞
- ◇ 早く戦力を増やそう
- ◇ モンゴル人とその財産
- ◇ 「神風特別攻撃隊」

- ◇ 青年と使命を定める
- ◇ 健康と衛生
- ◇ 子供をどうやって教育すればよいの
- ◇ 南方旅行記
- ◇ ボクノ見タ蒙古（日蒙文）
- ◇ 漢語の同音字
- ◇ 先生の精霊の前に

- ◇ 詩 海の音
- ◇ 弟の死に悲しむ詩
- ◇ 雨・風・雪
- ◇ 農民は国家の基礎
- ◇ 世の中の様々
- ◇ 季節の変わること
- ◇ ラマ教を改める論拠
- ◇ モンゴル青年の訓練大会
- ◇ チンギスハーン廟の祀りに集まった人たち
- ◇ イルチユス

- ◇ 蒙古の賢人—ホビライハーン
- ◇ 『宮本武蔵』
- ◇ 蒙訳 全亜細亞民族に叫ぶ
- ◇ 伝染病の予防
- ◇ 農家の基本問題
- ◇ 留学生に言いたいこと
- ◇ 日蒙会話講座
- ◇ 『青旗』紙に使う語彙
- ◇ 卷末詞

第三巻 第一号 (13)

- ◇ 表紙
- ◇ 巻頭詞
- ◇ 張総理が部下に話した言葉
- ◇ 大東亜戦争と民族
- ◇ 家畜と家畜生産物を統合する
- ◇ 旧バラゴ相撲の由来
- ◇ わが国の森林について
- ◇ 南方旅行記
- ◇ 元の姿
- ◇ 最低にして最高の道 (日文)
- ◇ 空の戦場
- ◇ 風・雨・雪

- ◇ 簡略した地球の起源
- ◇ 社会の現実には民族に深い関わりがある
- ◇ 『青旗』紙に使う語彙
- ◇ 新力
- ◇ 旅の青年
- ◇ 後ろ向いて悲しむ
- ◇ 日本のニュース
- ◇ 三つの問題
- ◇ 知恵の物語
- ◇ 卷末詞
- ◇ ラマ教の辞書

上記の細目からみると、『イフ・フフ・トグ』誌は政治、軍事、農業家畜、経済、文学教育、社会、歴史、風俗、地域故郷、世界奇聞など各分野の記事が掲載されている。

3. 文学作品について

『イフ・フフ・トグ』誌には合計90近く文学作品⁵が掲載されている。その中では詩が大半を占めていて作者不明な作品が多い。また、作品の内容から見ると、非常時であるからこそみんなが団結し外敵を退治しよう、大東亜共栄圏のため日本は聖戦に勝利しているなどを題材にしたものが多い。これは一種の宣伝にすぎないとも考えても過言ではない。また、この文芸誌が当時のモンゴル人の意志を伝達する道具とはいえない。なぜならば、この新聞社は日本人が経営していて読者の自由

5 小説、詩、感想文、翻訳を含む

投稿が厳しい検閲を得て掲載されていたようである。特に日本や関東軍に対する批判などは命を落とす危険も伴ったからである。

ここでは第三巻第一号に掲載されていた『新力』(sin-e kücün)という中編小説から当時の社会背景探ってみよう。

この小説はまず、

穏やかな川を上っていくと、興安嶺に囲まれた草原が広がって、そこにモンゴル村がある。ここから遠くに見える山の麓に二人の人が並んで立っているような二つの石碑がある。その石碑の一つには「多田羅中尉最後之所」(原文のママ)、もう一つには「チチグの亡くなった場所」と刻まれてある。

というように日本人とモンゴル人の名前を先に提示し、結末から書く事により読者をこれからのストーリーに興味、関心をもたせる効果がある。また、満洲国領域のモンゴル人と日本人の関係を謳う大きな役割を果たしている。しかし、終戦の年に当たるこの時期は満洲国内外の反日感情が高まりつつあったことは間違いない。

また第一節には次のような文がある。

多田羅は敵に追われていた。彼は目標もなくその道をひたすら進んでいく。奉天省をはじめ反日運動があってから日本人はどこに行っても居場所がなくなり、ひどい扱いを受けている現在、日本人である私の傷を治すところは果たしてあるのだろうか。このように思いながら走らせていると遠くの山の麓に灯りが見えた。(略)

チチグは「あっ、日本人だ」と驚いて父親の後ろに隠れた。多田羅は「もう終わりだ」と思った。(略)

ここで当時の奉天をはじめ満洲国国内で日本人がかなり追い詰められていたことがわかる。日本が満洲国を建国する前は、今の中国の東北地方では馬賊が力を持っていて、その多くが軍閥になりこの地を支配していた。黄文雄⁶は「この地がもともと馬賊上がりの軍閥に支配され、住民は塗炭の苦しみに喘いでいた。満洲国が樹立されると、まず関東軍、そして新設の満州警察によって治安がものみごとに確立された。満州事変の前年である1930年、満州の匪賊の数は奉天省3万人、吉林省1万人、熱河省1万4000人、黒龍江省6000人の計6万人に達し、そして事変後は、そこに敗残兵、逃亡兵が入り込み、軍備を充実させながら十数万にも膨れ上がった。」といった勢力関係であった。本文にある「奉天省をはじめ反日運動があった」という記述はこのあたりの匪賊の数が圧倒的に多いことを示している。

また同じく馬賊出身の張学良も日本人のみならず少数民族を弾圧していた。これについて本文では次のように書いてある。

6 黄文雄『日中戦争・真実の歴史』2005

「私はワン・テイ・リという。実は私はモンゴル人で、バトというモンゴルの名前がある。張学良政権下私たちは漢族に圧迫され、仕方なく漢族の名前に変えたのだ。今あなたが日本人だと聞き本当に安心した。」(略)

張学良は張作霖のあとを継ぎ軍閥を掌握していた。張氏はアメリカ、イギリスの言い通りになり、反日本運動に共謀し、モンゴル人を圧迫することが日に日に増してきた。バト一家はこのような乱暴な張学良の虐めを長年に渡って受け続け、漢族のふりをして、ようやくその弾圧から逃れた。(略)

当初、日本は張作霖を支援していたが、彼は次第に日本に反発するようになった。張作霖の暗殺後、張学良は父の地位を継承し奉天に拠点を置いていた。父親が日本軍に殺された信じ、彼は父親以上に反日を強め日本人居留民を襲撃し、暴行・虐殺・略奪を盛んにするようになった。終戦の年になると「奉天軍閥」と呼ばれる彼らの反日運動がより一層強さを増していく。

4. まとめ

本文は匪賊に襲われ居場所がなくなった日本の軍人が道に迷って山奥の村に入っていくとそこには彼と同じく軍事的、社会的圧迫から隠れて生活しているモンゴル人一家と運命的に出会う。親切的な一家の下で負傷した体の治療をしながら当時の反日派である張学良の行動を批判し、彼らのやっていることを暴きだし、こういう非常期にも関わらず日本人とモンゴル人は親密であることを強調して、力を出し合って張学良政権を倒して満洲国を建てなおすために努めようというメッセージを発している。

第二次世界大戦で日本が追い詰められていた状況の中、できるだけ多くの戦闘力になる人たちが必要となっていた時代でもあった。満洲国内のモンゴル人と西モンゴル⁷の人口はおよそ300万近くだと言われている。満洲国内のモンゴル人はともかく、西モンゴルも日本の支配下にあって彼らに日本の強さを知らせるため新聞などを宣伝媒体として情報を発信し、動員する必要があった。そこでこの小説「新力」はまさに日本とモンゴルの友好関係を描き、モンゴル人が新たなる力であると謳っている。

これからの課題として、『イフ・フフ・トグ』誌の未発見部分の発掘と文学作品についてより一層考察を深める必要があると考えている。

参考文献

(書籍・論文)

二木博史「蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物について」『日本モンゴル学会紀要』第31号p17～43、2001年
黄文雄『満洲国は日本の植民地ではなかった』ワック株式会社 2005年

広川佐保「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」『環日本海研究年報』第14号p104～126 2007年
ウリジバヤル『フフ・トグ』(青旗)紙とは何だったか — 「新京」で刊行されたモンゴル語新聞の紹介

『中国東北文化研究の広場』第2号 2009年

7 「蒙疆連合自治政府」を指す。1939年の9月に日本軍の主導のもとで、蒙疆連盟自治政府、察南自治政府、晋北自治政府の3自治政府が統合して設立された政府。初代の主席にはテムチュクドンロブ(徳王)が就任した。

宮脇淳子『世界史のなかの満洲帝国と日本』ワック株式会社 2010年
 満蒙研究プロジェクト編集委員会『満蒙の新しい地平線』桜美林大学北東アジア総合研究 2010年
 ウリジバヤル『「満洲国」時代のモンゴル人作家の創作① 短編小説 別れ』植民地文化研究 2010年

〈雑誌・新聞〉

『イフ・フフ・トグ』（大青旗）第1号～第7号、第10号～第13号 青旗社1943～1945年

『フフ・トグ』（青旗）第119号 1943年11月13日

付録

小説『新力』（sin-e küčün）の訳文

穏やかな川を上っていくと、興安嶺に囲まれた草原が広がって、そこにモンゴル村がある。ここから遠くに見える山の麓に二人の人が並んで立っているような二つの石碑がある。その石碑の一つには「多田羅中尉最後之所」（原文のまま）と、もう一つには「チチグの亡くなった場所」と刻まれてある。ある日、私は偶然ここを通過して、白髪になったチチグの父親に会って、その二人について話を聞いた。

—

これは、森が緑に覆われていたある夜中のこと。

真夜中に馬の走る音が聞こえ、草原を揺るがす。森の中は雄雉の鳴き声以外に何の音もなく静かになった。暫くして、疲れた馬の足の音が不規則に聞こえ、馬に乗っているのは多田羅という人であった。彼は一夜で幾つかの山を乗り越え、細い山道を放た矢の如く走ったのである。突然急斜面になり、馬は足を滑らせながら走る。多田羅は馬の首を撫でながら「ゆっくり走れ」と言い聞かせた。斜面がもっと急になり、馬が止まった。「どうした？早くいけ」と喉が哽れるまで言ったが、ぴくりとも動かなかった。

この時、何かを察知したかのように馬は耳を動かし、鼻をごろごろ鳴らし、大きく息をして、歩き出した。丘を下っていくと明るくなってきた。このとき、多田羅はずっと密林の中にいたことに気付いた。生い茂った草の上をしばらく歩いていくと水の流れる音が聞こえた。「あっ、水だ」と多田羅はうれしくて大声で叫んだ。馬も彼の言葉を理解したかのように、早足りで川岸に着いた。多田羅は左足を負傷していたためゆっくりと馬から下りて、うつぶせになり川の水を飲みはじめた。多田羅は少し元気が戻り、負傷した傷口を手で触ってみると、血で掌が真っ赤になった。「早く治さないといけない」と呟き、馬に乗って細い道に沿って進み出した。

多田羅は敵に追われていた。彼は目標もなくその道をひたすら進んでいく。奉天省をはじめ反日運動があってから日本人にはどこに行っても居場所がなくなり、ひどい扱いを受けている現在、日本人である私の傷を治すところは果たしてあるのだろうか。このように思いながら走らせていると遠くの山の麓に灯りが見えた。

多田羅はそこを目指していく。幸運にもモンゴル人が住んでいる村だった。

初夏の涼しい風が吹き、人々は深い眠りに入っていた。多田羅は高い塀の裕福そうな家の前で足を止め、ドアをノックした。しばらくして中から

「誰？」

と使用人のような男性がドアの隙間から覗いた。

「旅の者だが、一夜泊めてもらえないか」と多田羅は上手な中国語で尋ねた。

「この家の規則は厳しいので、真夜中に知らない人をとめることができない」と不機嫌に答えた。

「私は悪い者ではない、本当は私も馬も負傷しており、すぐに治さないといけないと思い…」と多田羅は弱音を吐いて乞い求めた。

「本当にそうなのですか、では少し待ってください」と言い、家主から許可をもらうため中へと入って行った。しばらくしてからドアが開き、

「さあ、どうぞ」と空いている部屋に案内した。彼は腹も減っているし、傷の痛みがもっと増していた。

このとき隣の部屋から「どこから来たかどなたかも知らないのに泊めてはいけない」と女性の声が聞こえてきた。

「どうしてだめなのだ、重傷なのに放っておくにわけにはいけないだろう」と大声で言ったのはこの家の主人である。

「ほんとに馬鹿ね、後で何かあったらどうするの？」とその女性は大声で叫んでいた。

「父さん、この人どうして怪我をしたの？」とたずねたのは愛娘のチチグであった。

「それは私もわからない、馬から落ちたかもしれない」と言った。

このような話声が聞こえて間もなく、父親、愛娘のチチグと使用人が入ってきた。父親は大きくて、太っていて、元気そうな人だった。入って来るなり多田羅を見て、

「旅人ってあなたか？」と聞かれた。

「はい。夜分遅くて本当に申し訳ない、大怪我をしているもので、仕方なく…」と頭を下げた。使用人が灯りを近づけて見ると顔色が真っ青で、眼が光っていた。父親はびっくりして二歩下がった。

チチグも「あっ、日本人だ」と驚いて父親の後ろに隠れた。多田羅は「もう終わりだ」と思った。このとき父親は、

「じゃ、そこの部屋へどうぞ」と言うと、彼は無意識に母国語で「すみません」と言った。

多田羅は使用人の後ろをついて案内された部屋へ入って座った。チチグはすぐに彼の汚れた服を脱がせ、怪我の処置をする。太ももに二発の銃弾が入った痕があった。彼女はとても親切に白い布で傷口を包んだ。父親は、

「匪賊にやられたのか？」と聞いた。

多田羅はこの突然の質問に動揺しながら「はい」と答えた。

「自己紹介が遅くて申し訳ないけど、実は私多田羅という日本人なのだ」とどんな結果になるだろうが、事実を打ち明けた。このとき家主は声を低くして、

「私はワン・テイ・リという。実は私はモンゴル人で、バトというモンゴルの名前がある。張学良政権下私たちは漢族に圧迫され、仕方なく漢族の名前に変えたのだ。今あなたが日本人だと聞き本当に安心した。心配なく我が家で療養してください。この子は私の娘ジン・ランであり、本名はチチグという」と自分の娘を紹介して、後のことは娘に任して自分は出て行った。

このころ、張学良は張作霖のあとを継ぎ軍閥を掌握していた。張氏はアメリカ、イギリスの言い

なりになり、反日運動で共謀し、モンゴル人を圧迫することが日に日に増してきた。バト一家はこのような乱暴な張学良の虐めを長年に渡って受け続け、漢族であるようなふりをして、ようやくその圧迫から逃れていた。

多田羅は満洲開拓団の警備隊長として町の警備をしていた。そしてある日の午後5時に突然銃声が聞こえたので、外に出てみたら10人ぐらい馬賊がやってきた。彼は急いで刀と銃を取り馬賊に立ち向い、あっという間に何人かの馬賊を射止めた。でも彼も銃弾を浴び足に怪我をしてしまった。彼は銃弾が尽き、戦う力を失い、馬に乗って森へ逃げた。それから5、6時間が休まずに走り、冒頭で述べたようにこの家に辿り着いた。

二

次の日、目を覚ますと前日の怪我の痛みと疲れが取れていた。ぐっすり眠れたので元気を取り戻した。多田羅は昨日起きたことを思い、まず頭に浮かんだのは、馬賊を撃ち殺したので張学良の部下が必ず私を捕まえるために来ると考えていると、

「どう？昨日はよく眠れたか？」と微笑みながらバト爺さんが入ってきた。

「おかげさまで、大分よくなった」と掌をこすりながら言い返した。

「傷口は痛む？」と聞きながらチチグは布巾と顔を洗う水を持ってきてくれた。

「包帯を新しいに換えたらどうだい？」とバトは娘のチチグに向かって言った。多田羅はチチグの親切な対応とバトの優しい心に打たれ感動した。

バトはフェルトの上に座りゆっくりと話しはじめた。

「私たちがこのように隠れて生活しているのは、漢族が我が満洲の地に入ってきて民衆を圧迫したからだ。その執権を握っている張作霖は愚かなもので、その子張学良も愚かである。これらのことを考えてみて満洲と日本は力をあわせない限り永遠の王道楽土にはならない。あいつらはこのことも知らずアメリカ、イギリスの手先になり、満洲に害を加えている。張学良は目を覚まさないで満洲はともかく、中華民国も滅びるだろう。」

多田羅はバトの話から、彼は私が日本人であることを知って、私の命を救ったと思った。

「でも、私を家に居させたことを漢軍が知れば、きっとあなたたちにも迷惑がかかると思う」と多田羅が言った。するとバトは、

「そんなこと気にしないで、怖がることはない。日本人と私たちの顔の色は同じく、服装を換えればわかるはずがない。そうしよう！私の服をこちらに持ってきて」とチチグに向かって言った。

チチグは血の付いた包帯を手にとって「はい」と言って、出て行った。

太陽の光が窓から射している。特にチチグの顔がとても美しく見えた。細い眉毛、赤く塗ったみたいな唇、まるい顔を見れば、誰もが好きになる。

三

多田羅は服を着替え、帽子をかぶり、チチグに髪を編んでもらった。

「モンゴル人そっくり」とチチグは手で口を塞いで笑った。多田羅も一緒に笑ったが自分がこの

ような弱い立場になったことで心細くなり、

「私を弱虫で、無能だと思うかい」と尋ねた。

「どうしてそう考えるの？」とチチグは眉を動かした。

「男として戦いに負けてしまったから」と多田羅は言った。

「あなたの考えは間違っていると思う。敵に勝つには時期とチャンスを待たねばならない。私、男の辛抱強く戦っている姿を見てとても良いことだと思う。そのときが来るまで自分の体をゆっくり休ませておいたほうが為になると思う」とチチグは言った。

多田羅はチチグの話に感動し、チチグもずっと多田羅を見つめていた。多田羅とチチグの間には国境を越えた親切な関係が築かれた。夕方になり、チチグはご飯の準備をするため部屋を出て行った。多田羅は少し疲れたので横になったが、チチグの話が頭から離れない「男の辛抱強く戦う姿はとても素敵」。考えてみるとチチグの言ったことは正しいのだとひとりで微笑んだ。我らは張学良政権を倒し、満洲国のために力を尽くさなければならない。急がずにそのときを待とう。彼はこのように考えているうちに、全身の血が沸き立ち、元気になったような気がした。

隣の部屋から「多田羅さんご飯よ」とチチグの声が聞こえた。(終)

A study of *ਅੱਧ ਅੱਧ ਚੰਦ* (*A Large blue flag*)

Wuljibayar

2013年6月

新潟産業大学経済学部紀要 第42号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.42 June 2013